

情緒から論理へ

鈴木光司



著者略歴

鈴木光司 (すずき こうじ)

1957年、静岡県浜松市生まれ。慶應義塾大学文学部仏文科卒。90年、デビュー作の『楽園』（新潮社）が日本ファンタジーノベル大賞優秀賞受賞。その後、『リング』『らせん』『ループ』『バースデイ』（以上、角川書店）が計800万部のベストセラーとなり、一大ホラーブームを巻き起こす。著作は世界20カ国語に翻訳されている。また、“文壇最強の子育てパパ”の異名の通り、二人の娘を育て上げた経験から、政府の諮問機関「少子化への対応を推進する国民会議」や東京都青少年問題協議会の委員などを歴任。作家になる前、塾の講師や家庭教師をして子どもたちに勉強を教えた経験もある。2008年12月、サイエンスホラー小説『エッジ』（角川書店）を発刊。

ソフトバンク新書 100

じょうちょ ろんり 情緒から論理へ

2009年3月24日 初版第1刷発行

著者：すずき こうじ
鈴木光司

発行者：新田光敏

発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂 4-13-13

電話：03-5549-1201（営業部）

装丁：松 昭教

組版：アーティザンカンパニー株式会社

印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。本書の内容に関するご質問等は、小社学芸書籍編集部まで必ず背面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

©Koji Suzuki 2009 Printed in Japan

ISBN 978-4-7973-4844-6

情緒から論理へ

江苏工业学院图书馆
藏书章



鈴木光司

ソフトバンク新書

100

はじめに

僕の故郷である静岡県浜松市は、西の端を浜名湖、東の端を諏訪湖を水源とする天竜川に接し、南は波の荒い遠州灘に面しています。一年を通して気候は温暖ですが、冬になると空つ風が吹きます。小学校の遠足では、市街地にある学校から中田島砂丘まで、二時間かけて歩いたものです。

一〇歳の頃のある日曜日、中田島砂丘とほど近いところに住む知り合いのおじさんから連絡をもらいました。「数日前に、砂丘に海亀が上陸して卵を産み落としていたから、見に来てごらん」と言うのです。当時、家の庭で亀を数匹飼っていた僕は、この申し出に大いに興味をそそられ、ふたつ返事で「すぐに行く」と答え、両親と一緒に車で中田島砂丘に向かいました。

浜に着き、目印のところを掘ってみると、海亀の卵がちょうど一〇個出てきました。本来、海亀は一回の産卵で一〇〇個ほど卵を産みますが、このときはなぜか一〇個し

かありませんでした。ピンポン玉ほどの大きさで、触つてみるとぶよぶよと柔らかく、温かな手応えがあります。

手の平に乗せ、太陽の光にかざして観察しているうち、僕は、この卵を自分の手元で孵化させたくまりました。中田島砂丘の砂を木製の樽に詰め、同程度の深さに卵を埋めれば、自宅の庭先で孵化させることができると思つたのです。そこで、そのアイデアを大人たちに話し、砂をバケツに詰め、その中に一〇個の卵を入れようとしたところ、おじさんがこう言いました。

「せめて半分は残してあげたらどうだい？」

一〇個の卵を全部持ち帰るのではなく、せめて五個はもとのままに残しておくべきだと言うのです。でなければ、母海亀がかわいそうだと、と。

しかし、それは、自宅で孵化させる確率を半分に減らすことを意味する……。僕は単純にそう考え、「全部持つていく」と断乎言い張りました。その頑固さに、おじさんも両親も折れ、僕は一〇個の卵を砂と一緒にバケツに詰め、自宅に持ち帰りました。

自宅の庭の、日の当たる場所に樽を置き、僕は毎日海亀の卵を観察しました。荒波

の押し寄せる遠州灘から遠く離れ、砂丘から切り取られた小さな樽であつても、太陽熱に温められさえすれば、孵化するとばかり思い込み、やがて樽の中から、かわいい海亀の赤ちゃんが一〇匹這い出してくるに違いないと胸をわくわくさせたのでした。そのシーンさえ観察できれば、海亀たちを遠州灘に帰してあげようと考えていました。

おじさんは一カ月ばかりで孵化するようなことを言っていました、その期日が近づいても卵はいっこうに孵化する気配を見せません。さらに数日が過ぎた頃、心配になつて樽の中から卵を取り出してみました。初めて中田島で手に取ったときに比べ、何となく生気が失せているように感じましたが、祈りを込めて卵を砂の中に戻しました。さらに数日が過ぎても変化はなく、不安は高まり、もう一度掘り起こしてみると、砂の中から悪臭が立ち上つてきました。卵は全部、腐つていたのです。

悪臭が鼻をつく中で呆然として樽を見下ろしているうち、大きな後悔に襲われてきました。母海亀が涙を流しながら産み落とした卵を、僕のせいでみんな腐らせてしまった……。こんなことなら、卵の半分を砂浜に残してくればよかった。しばらく経つた後、なぜ卵が死んでしまったのか、数々の疑問が頭の中で渦を巻きました。それは

やがて、ひとつの問いに収斂していきます。

「なぜ、樽の中の卵に、ここが自然の砂浜でないことが察知できたのか」

卵を覆っている砂を運んで日に当てれば卵を騙せると思っていたのですが、自然はそんなに甘いものではありませんでした。間近で生じる潮の満ち干き、塩分を含んだ海水の浸入……、砂浜は、それ自体が巨大な子宮であるかのように、ゆったりと呼吸しています。自然の営みから切り離されて、人工の箱に閉じ込められたことぐらい、すぐに察知できて当然です。

自然は実に複雑な様相を呈しています。一筋縄ではいきません。その日の夜、僕は星空を見上げながら、自然が織りなす不思議さに思いを馳せ、世界の仕組みを知りたいと強く願いました。宇宙はどうやって始まったのか。生命はどうやって誕生して、現在、どんなルールのもとに動いているのか。

物事の原理を理解し、人間を取り巻く事象がどのように生起するのかがわかれば、もう少し正しい判断ができるのではないかと、反省すると同時に、ささやかな希望を抱いたのです。

そんな思いを抱いたまま、僕は詩と小説を書き始めました。その後、大学でフランス文学を学び、結婚して次女が生まれると同時に作家デビューを果たし、高校教師であつた妻に代わつて二人の娘の子育てを担当することになりました。

長女が九歳、次女が五歳のときだつたでしょうか。何気なく出かけたデパートの屋上で、緑亀を売っているペットショップを発見しました。娘たちの小さな手に乗るサイズの緑亀が、水槽の中で元気いっぱい泳いでいます。子どもの頃に、海亀の卵を孵化させようとして失敗した思い出が、頭の中をよぎつたのかもしれませんが。衝動的に緑亀を二匹飼つて、長女と次女に一匹ずつ与えて育てさせようと思ひつきました。

家に帰り、娘たちの前にかわいい緑亀を差し出すと、二人とも大喜びで、水槽に入れて世話を始めました。しかし、一週間ばかり経つた頃、次女が泣きそうな顔でこう訊いてきました。

「パパ、わたしの緑亀、動かなくなっちゃったけど、眠ってるだけだよね」

ちよつと見ただけで嫌な予感に襲われました。長女の緑亀が元気に泳ぐ横で、次女の緑亀は水槽の底に張りついたまま、動こうとしません。

「もうしばらく様子を見てみようか」

ひよっとしたら、そのうち動き始めるかもしれないと淡い期待を抱き、僕たちはしばらく見守ることにしました。

翌日になっても亀は同じところにじっとしているだけで、動く気配を見せません。そこで、水槽の底から拾い上げ、手の平に乗せてしばらく観察しました。どうやら、死んでしまったようです。

その事実を告げると、次女はひとしきり泣いた後、こう訊いてきました。

「生き物は、なぜ死んじゃうの？」

五歳の子どもにとつては、当然頭に浮かぶべき、平凡でありきたりな問いかもしれません。死は周囲に悲しみをもたらします。子どもの目には、それまで生きていた亀が動かなくなってしまったのが、実に理不尽な出来事と映り、「死」なんてなくなつてしまえばいいと考えたのでしょう。

このとき僕は、「死」という悲しい現象の、プラスの意味を説明できないものかと、問いの方向を変えてみたのです。「なぜ生命には死があるのか」から「なぜ生命は永

遠に生きてはいけな^いのか」へ。死によって世代交替をする利点を次女に説明できれば、悲しみが少し薄くなると思ったからです。

その頃、僕は『リング』『らせん』の完結編である『ループ』を書いていました。テーマに据えたのは、国家や宗教、文化を超えたところで普遍的な善は存在し得るかどうか、あるとすればどんな形式を持つか、ということでした。生物学的な見地に立つて考えると、どうも普遍的な善は「生命の多様性を維持すること」となりそうです。そこで、悪を、多様性を阻害する概念として「均一化、硬直化」と対置し、わかりやすく癌細胞^{がん}に象徴させました。

『ループ』では、世界に均一化をもたらす「転移性ヒトガンウイルス」が蔓延した近未来を舞台にストーリーが展開します。

癌細胞は、シャーレの中で培養する限り永遠の生命を保ち、同じ細胞を延々と繰り返し増殖させていきます。生成消滅を繰り返し、変化しながら有用な器官へと成長する生体細胞とは程遠く、グロテスクともいえる暗黒の世界をつくり上げます。変化も進歩もなく、一カ所にとどまってまったく同じことを単調に繰り返すだけの、極度の

退屈に支配された世界を望む人間は誰もいないでしょう。

生命樹の幹を太くし、枝振りの方向性を豊かにするためにこそ、死は必要不可欠なのです。

一過性の話し言葉ではなく書き言葉を獲得した人間が、死を有効活用するためには、繰り返し繰り返し、経験と知識の総体である情報を次の世代に伝えていかなければなりません。同じことを延々と受け渡すのではなく、古きものから学びつつ、新しい発想による体験と知識をつけ加えることによって、多様性と進歩が保証されるのです。

それはまた、過去を克服しながら、未来からやってくるさまざまな問題に、新しい答えを出し続けることでもあります。そういった行為の連続に必要とされるのは、過去の答えを暗記するだけではなく、物事の原理、理論を理解した上で新しい問題において応用力を発揮させる態度です。

娘たちと同世代の若者たちにその思いを伝えるべく、モチベーションをかきたてながら完成させたのが、最新作『エッジ』です。『エッジ』の主要登場人物である父は、世界の仕組みを解き明かすためのツールである、物理学、数学、哲学を、娘に教えた

す。一七歳で父を失った娘は、父から受け継いだ論理を武器に、宇宙開闢かいびやく以来最悪の危機に見舞われた世界と対峙します。

「大切なのは、世界に共通する論理を身につけて自分の力でしっかり考えること」

小説の中で、父が娘に言う台詞は、僕が普段から自分の娘たちに語っている言葉でもあります。

情緒から論理へ……、その思いは『エッジ』を執筆することによってますます強くなりました。

古来、情緒に偏り過ぎてきた日本人に、なぜ論理が必要なのか、これから述べていこうと思います。

目次

はじめに 3

第一章 論理が日本をよくする

◎ 対立概念で世界を見る 18

◎ 母性に振り切れた針を戻す 23

◎ なぜ勉強するのか？ 25

◎ 学校教育は子どもの能力を高めるか 28

第二章 論理的とはどういうことか

◎ 大局観を持つ 38

◎ データにのっとなって議論する 44

◎ 言葉で伝える 49

◎ 筋道を立て、勇気をもって表現する 56

◎ 企業と資本主義の論理 61

◎ 国民的議論を避けてはいけない 69

◎ 論理はどこからきたか 73

第三章 なぜ論理が大切なのか

◎ 藤原正彦氏に異論を唱える 80

◎ 世界に共通する論理を求める 93

第四章 情緒的すぎる国

◎秋葉原無差別殺傷事件はなぜ起きたか 100

◎教員免許更新より免許廃止を 108

◎高速道路バイク二人乗りは本当に危険なのか 116

◎ライフジャケットで命は守られるか 124

◎優しいサービスがムダを生む 128

◎根拠なき懷古主義に陥ってはいけない 134

第五章 情緒的民族の失敗

◎日本人は戦争に長けていたか 146

◎日露戦争が生んだ過信 152